

3.11 以降の現代社会理論に向けて

—— A. メルッチの惑星社会論への道行きを手がかりに——

鈴木 鉄 忠

Toward Contemporary Social Theories after 3/11: Preliminary Consideration of A. Melucci's Concept of the Planetary Society

Tetsutada SUZUKI

On March 11, 2011, a natural disaster and severe nuclear accident caused great damage to a large part of eastern Japan and consequently revealed to us the very fragility of contemporary social systems. The problematic situations since 3/11 are so vast and complicated that we are far from the normalization the government declared. In order to understand these problems, this article focuses upon the theoretical efforts of an Italian sociologist, Alberto Melucci. He considers today's globalized world a "planetary society," a society totally interconnected within itself but still dependent on its natural home. An awareness of this twofold relation to the globe could provide a theoretical hint toward tackling the multiple problems since 3/11. First, we review Melucci's theoretical development in his works and show that he utilized the term "complex society" to analyze the main feature of contemporary society in his intermediate works but substituted it with the concept of a planetary society in his later works. Second, we examine the meaning of complex society in relation to the problematic situations after 3/11. Next, a discussion will follow that the planetary society incorporates aspects of the physical limits of the society, the planet Earth, and the body, which the complex society does not.

1. 問題設定—— 3.11 以降、私たちはいかなる社会に生きているのか

(1) 「3.11」が突き付けた問い

私たちはいかなる社会に生きているのか——社会学が社会的なるものの知識を産出する学問として成立して以来、この問いは社会学固有の問題系を形作ってきた。その意味で「3.11」は、こうした同時代認識の問いを改めてはっきりと突き付けた。2011年3月11日の東日本大

震災、津波、福島第一原子力発電所の過酷事故によって顕在化した現代社会の現実とは何だったか。

このとき露わになった社会とは、東日本大震災の映像がほぼリアルタイムで全世界中に流されたように、情報が世界の隅々を瞬時に連結するようなグローバル社会でありながら、肝心な情報——例えば原発事故直後からの放射性物質の拡散経路——は多くの日本国民に知らされず、ごく一部の関係者によって統制されているという現実だった。しかしながら「3.11」はグローブ（地球）のより深い意味、つまり私たちの生がたった1つの地球に拘束されていること、グローバル社会もこの外には存続できないという現実をも示した。

では「3.11」によって顕在化した現代社会の「グローバル化」と「グローブ（地球）」の特質をどのように捉えればよいのだろうか。その糸口となるのがイタリアの社会学者アルベルト・メルッチ（Alberto Melucci）の惑星社会論である。

(2) メルッチの現代社会理論

私たちは、グローバル化社会となった惑星で生活している。それは、外部の環境および私たちの社会生活そのものに介入していく力によって、完全に相互に結合していく社会であるが、しかし依然として、そのような介入の手が届かない本来の生息地である惑星としての地球（the planet Earth）に拘束されているような社会でもある。社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的限界という、惑星としての地球の二重の関係は、私たちがそこで私生活を営む「惑星社会（the planetary society）」を規定している¹⁾。

上記の一節は、1996年に発表されたメルッチの理論的主著『プレイング・セルフ』の「イントロダクション」にある。ここでメルッチは現代社会の特質を「惑星社会」という言葉で捉える。「惑星社会」は、社会的行為の可能性がグローバルに拡大していくと同時に、しかしなおもたったひとつの惑星地球（a planet Earth）に依存しているような社会を意味する。こうした〈社会的行為の可能性のグローバルな拡大〉と〈その物理的な限界〉の二重性のなかに現代社会の特質をみるのである。

こうした視角は、1990年代当時に影響力を持ったグローバリゼーション論といささか異なっている。それらの論点は、地球規模の社会関係の強化（A. ギデンズ）、世界の圧縮（R. ロバートソン）、フローとネットワーク（M. カステル）といった〈社会的行為の可能性のグローバルな拡大とそれに伴う相互結合〉をめぐる行われていたといえよう。そのなかで、メルッチのように〈地球の物理的限界〉までいっしょに取り上げるのはやや異質な位置取りといえるかもしれない。しかしながら、「3.11以降」の社会は、人間の行為の可能性がグローバルに拡

大し相互結合しているという認識だけでなく、生態系と身体という物理的限界にも目を向ける重要性をあらためて示した。メルッチは90年代にはすでにこうした両面性を視界に捉えていた。

さて、冒頭に引用した一節は、『プレイング・セルフ』の「イントロダクション」にあると述べた。先立つ1991年に発表されたイタリア語版の『プレイング・セルフ』（『自己の遊び』）と読み比べると、そこには先に引用した最初の一文（「私たちは、グローバル化社会となった惑星で生活している」）があるだけで、それ以降の文章は英語版で新たに加えられたものであることがわかる。後で述べるように、1980年代のメルッチは「複合社会」という言い方で現代社会認識を表現していた。しかし1990年初頭以降、メルッチのなかで現代社会認識は「惑星社会」へと定着していく。それ以後メルッチはこの用語を変えていない。しかしながら「惑星社会」論は、さらに練り上げられていく途上で2001年に白血病で夭逝したメルッチの、未完の社会理論となってしまった。

これまで日本におけるメルッチの研究の多くは1980年代の仕事に集中していた²⁾。そこでは「現在に生きる遊牧民」としての複合社会におけるアイデンティティの不確定性と社会運動をめぐる考察が注目された。近年では惑星社会と身体を中心テーマに取り上げるようになった90年代以降の作品が検討され始めている³⁾。しかしながら80年代から90年代の作品にみられるメルッチの社会認識がどのように変化していったのかについては十分に検討されていない。それらの間が断絶しているように見えるため、「惑星社会」を以前の社会認識のなかに位置付けることができず、理解することを難しくしているのである⁴⁾。

(3) 本稿の目的

本稿の目的は、「3.11 以降の状況」を理論的に理解するための予備的な考察をメルッチの社会認識の道行きを手がかりにしながら行うことにある。「3.11」が突き付けた問題を理解しようという学術的試みは様々なところで行われている⁵⁾。そのなかで本稿の試みは、2013年度から中央大学社会科学研究所の新規チームとして始まった「3.11 以降の“惑星社会の諸問題 (the multiple problems in the planetary society)”」を研究テーマとする共同研究のなかに位置付けられる。

ここで「3.11 以降」とは何を意味するのか。研究チームの代表者である新原道信は「『以降』には、メルッチがいうところの『劇的な収支決算』の状況が持続していくという意味がこめられて」という。それは「突然、想定外の事件が起きたが、困難をのりこえ、『もとどおり』のありかたへと復興していく」という認識とは異なる見方であると、あえて断っている。そして「『3.11 以前』にも“未発の状態 (stato nascente)”として存在し、実はそれが、『客観的現実のなかにすでにとっくに存在』していたのだと認識せざるを得なくなったのが、

『3.11以降の状況』である」と述べる⁶⁾。つまり「3.11」のそれ以前と以後の「断絶」だけを見るのではなく、むしろその「連続」にも注意を払う。「3.11」以前にすでに存在していた「劇的な収支決算」とは何か、それによってどのような「惑星社会の諸問題」が浮かび上がるのか、これらの問いにメルッチの社会認識の歩みを手がかりに伝えていくのが本稿の目的である。

メルッチの社会認識の方法は、「境界領域におけるブリコラージュとエラボレーション (*bricolage and elaboration in frontier territories*)」という特徴を持っている。「一貫した計画によらず、手元にある有り合わせの材料を適宜組み合わせることで問題を解決していく」「日曜大工」などの意味を持つ「ブリコラージュ」は、メルッチが自身の現代社会認識の方法とそこから産出される理論の特徴を示すために、用いた言葉である⁷⁾。こうした方針はとりわけ1980年代後半以降の作品に顕著である。同時代認識を「不慣れた領域への探索 (*exploration of unfamiliar territory*)」にたとえたメルッチは、「手掛かりとなるものを集めてそれを繋ぎ合わせ、同じトラックを何度もスターティング・ポイントに舞い戻りながら走り、すぐに分かる記号を認知したあと、一周目で見逃した記号を次に発見する」ようなやり方でしか、「私たちが直面している状況の新しさを解明することはできない」と考える⁸⁾。特に社会学と臨床心理学、社会システム論と行為論といった異なった立場の個別科学や社会理論の境界領域に身を置いて、そこから説明すべき問題に合わせてそれらの理論、概念、知見をブリコラージュしていく。さらに、ブリコラージュしたひとまとまりの理論的フレームワークを叙述のなかで錬成し彫琢していく。こうしたエラボレーションを何度も重ねあわせるようにして議論を展開していく。一見すると異なる著書のなかに重複するような内容が書かれているように見える。しかしよく見ると微妙に加筆修正が施されていたり、議論の順番が変わっていたりする。冒頭で引用した惑星社会の一節はまさにその例である。本稿ではこうした変化に注意しながらメルッチの現代社会認識の道行きを辿っていく。

本稿の構成は以下になる。第2章では、メルッチが「惑星社会」という社会認識に至るまでの理論的な歩みを彼の全著書に位置付けて概観する。第3章では、「中期」メルッチが社会認識のキーワードとして多用していた「複合社会」を検討する。それがどのように「惑星社会」へとつながっていくのかを考察する。最後に、「惑星社会」のなかで新たに出てきた論点を示して結びにかえる。

2. メルッチの現代社会認識の道行き

(1) 同時代認識への関心

いったい現代がどのような社会なのか。とりわけ「近代」といわれた時代と何が違うのか。メルッチはこの問いに大きな関心を寄せていた。そして彼自身の答えを模索し続けていた。

『現在に生きる遊牧民』の「日本語版への著書序文」の初めてこのように述べている。

今日の社会を分析する研究者は「脱工業化」「ポストモダン」「後期資本主義」「複雑性」「情報化」など、「社会」を修飾する枕詞を用いる。[……] こうした形容詞や接頭語による限定が必要となったその理由は、今日まで社会を解釈する方法として私たちが依拠してきた「近代性」に関する二つのパラダイム——ひとつは資本主義社会というパラダイムであり、いま一つは産業社会というパラダイムである——が、もはや時代の変化についてゆけなくなったからである⁹⁾。

メルッチはこれまで近代社会を説明していた理論モデルとして「資本主義社会」と「産業社会」の2つを挙げている。前者はマルクス主義の系譜に属し、後者はヴェーバー理論に位置付けられる。そして「社会」を修飾する新しい枕詞が用いられるようになることは、裏をかえせば2つの理論モデルが「時代の変化」を説明できなくなっていることの表れだと捉えている。一般的に1960年代以降にこうした「変化」が顕著になってきた。「脱」「ポスト」と訳された接頭辞“post”は、メルッチの師だったA. トゥレーヌの『脱工業化の社会』(1969年)にみられるし、J-F. リオタールの『ポスト・モダンの条件』(1979年)にみられる。また「後期」「晩期」という接頭辞“late”は、メルッチが親交を重ねたJ. ハーバーマスの『晩期資本主義における正統化の問題』(1973年)にみられる。「複雑性」はハーバーマスと論争をたたかわせたN. ルーマンの社会システム論のキーワードだった。

こうした接頭辞をメルッチも用いていた。しかしそれは常に暫定的であった。事実、メルッチは現代社会を認識することにきわめて慎重な構えを持っていた。

このような理論的混乱を隠蔽したり、枕詞を用いることで逃げるのではなく、むしろ、私たちが語っている社会が一体どのようなものなのかは誰にもはっきりしない、ということをも明言した方が、いいのではないかというのが、私の見解である。[……] 私たちが今日の社会変動を定義する理論的フレームワークを満足できる形で構築するためには、まだまだ多くの時間と労力を必要とするであろう。そして本当の意味でのパラダイム転換が当然必要となろう¹⁰⁾。

こうした理論的な不満をどうにかしたいという問題意識をメルッチは常に持ち続けていたように思われる。それが叙述形式のなかによく表れており、そのときに到達した社会認識の地平の最前線を著作に書き込んでいる。しかしそれはあくまでも暫定的であり、もし認識が深まったならばより適した言葉に訂正しようという余地を残した書き方をしている。

(2) 社会認識の変化

メルッチがこれまでに発表した著書は30を超える。以下は、メルッチがイタリア語と英語で公刊した全著作を年代順に並べたものである¹¹⁾。なお、2001年に夭逝したメルッチへのオマージュとして編まれた論集 [31] と [32] 以外は、彼の単著ないし編著である。

- [1] 1974 『支配階級と産業化——フランス資本主義発展における支配的イデオロギーと実践』(博士論文)
- [2] 1974 『社会闘争と変動——近代化の社会学に反して』
- [3] 1976 『反抗の運動——集合行為の理論と形態』(編著)
- [4] 1977 『政治システム, 政党, 社会運動』
- [5] 1982 『現在の創造——運動, アイデンティティ, 諸個人の欲求』
- [6] 1983 『国家なき民族——西欧のエスニック・民族運動』(M. ディアーニとの共著)
- [7] 1984 『いくつものもうひとつのコード——大都市における運動エリア』(編著)
- [8] 1984 『異質な身体——心理療法における内的時間と社会的時間』
- [9] 1986 『社会運動と政治システム』
- [10] 1987 『変わりつつある自由——日常のエコロジー』
- [11] 1989 『現在に生きる遊牧民——現代社会における社会運動と個人の欲求』(英書)
- [12] 1990 『〔新版〕政治システム, 政党, 社会運動』(序論と新しい章を追加)
- [13] 1991 『自己の遊び——グローバル社会における自己の変化』
- [14] 1991 『〔新版〕現在の創造——複合社会における社会運動』(旧版から大幅改訂)
- [15] 1991 『聴くことの場合——青年期と相談サービス』(A. ファブリーニ夫人との共著)
- [16] 1992 『黄金の年代——夢と体験のはざまの青年期』(A. ファブリーニ夫人との共著)
- [17] 1992 『〔新版〕国家なき民族——西欧のエスニック・民族的運動』(M. ディアーニとの共著, 序論と新しい2章分を追加)
- [18] 1993 『若者たちのかたわらで——青年期の若者支援〈チェントロアリア〉, ある体験の編年誌』(A. ファブリーニ夫人との共著)
- [19] 1994 『時代の移動／移動の時代——未来は今』
- [20] 1994 『創造力——神話, 言説, 過程』
- [21] 1996 『ブレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』(英書)
- [22] 1996 『チャレンジング・コード——情報時代の集合行為』(英書)
- [23] 1998 『リフレクシヴ・ソシオロジーにむけて——質的調査と文化』(編著)
- [24] 1998 『モダニティの終焉か?』(編著)
- [25] 2000 『ふつうのひとびと——ロマーニヤ方言の詩』(詩集)

- [26] 2000 『日々と事柄』(詩集)
- [27] 2000 『キーワード——社会科学の新しい辞書のために』(編著)
- [28] 2000 『人間になる——惑星社会におけるコンフリクトと新しい市民権』
パーソン
- [29] 2000 『文化のゲーム／掛け金とされた文化——共生のための差異』
- [30] 2000 『熱気球』(詩集)
- [31] 2003 『惑星社会におけるアイデンティティと運動』(A. レオニーニ編, 2003年ミラノ
大学で行われたメルッチ追悼シンポジウムの講演をおさめた論集)
- [32] 2010 『境界領域の社会学——アルベルト・メルッチの作品をめぐる論稿』(G. キア
レッティと M. ギスレーニによる共編著)

ここで上記の全著作を検討することが本稿の目的ではない。本稿の問題設定に限定して、現代社会認識の問いにメルッチがどう応えていったかに焦点を絞りたい。こうした点に限った場合、メルッチの社会認識の表現が変化する時期が見いだせる。少なくとも以下の4つに時期区分できるのではないかと思う(しかしこの区分はあくまで作業仮説であり、さらなる検討の余地があることを付け加えておきたい)。

- ・「初期」1974-1981：紛争と社会変動(著作 [1] ~ [4])
- ・「中期」1982-1990：複合社会におけるアイデンティティの不確定性と社会運動(著作 [5] ~ [12])
- ・「後期」1991-1997：境界領域の社会学, 惑星社会, 内なる惑星としての身体(著作 [13] ~ [22])
- ・「晩期」1998-2001：聴くこと社会学へ(著作 [23] ~ [32])

(3) 4つの道行きにおける現代社会認識の特徴

「初期」はメルッチが30歳代の頃の作品になる。1974年の31歳のときにトゥレーヌの指導を受けて博士論文『支配階級と産業化——フランス資本主義発展における支配的イデオロギーと実践』を発表した。その後の作品の題目からわかるように、産業化, 階級, 社会的不平等といったテーマに取り組んでいる。紛争と社会変動との関連をめぐる考察は、その後に「新しい社会運動」への関心と結びつき、「中期」の代表的作品へとつながる。このときは近代社会の2つの理論的パラダイムと対決しながら社会認識を深めていった時期と言えよう。1973年に初職を得たサッサリ大学法学部で担当したのが産業社会学だったことからそれがうかがえる。

「初期」から「中期」の間に位置する1970年代末では、やがてメルッチが独自の社会理論を創り上げる重要な調査研究に着手する。1976年, 33歳でミラノ大学政治科学部に就任し, 政

治社会学を担当する。そのミラノで都市圏の社会運動に関する長期の質的調査に従事する。平和運動、若者運動、フェミニズム運動、エコロジー運動、宗教運動といったいわゆる「新しい社会運動」の共同調査研究を行う。さらに1979年にはミラノでアンナ・ファブリーニ夫人とともに青少年支援と臨床心理学の共同研究所「チェントロ・アリア」を起ち上げる。ファブリーニ夫人が「彼の社会学の固有性は、サイコセラピストとして日常実践を積み重ねてきたことに由来している」¹²⁾と述べているように、臨床心理学の学識と心理療法の実践を通じて、ミクロ-マクロ・リンク、すなわち集合的なプロセスと個人の体験を重ねあわせる独自の社会認識を練り上げていった。

これらの調査研究の成果が「中期」の代表作となる。「新しい社会運動」の質的調査研究に基づく1982年の『現在の創造——運動、アイデンティティ、諸個人の欲求』と1984年の『いくつものもうひとつのコード——大都市における運動エリア』、心理療法の実践と調査研究の成果である1984年の『異質な身体——心理療法における内的時間と社会的時間』等々が発表された。運動といったマクロな次元と、アイデンティティ、欲求、身体といったミクロな次元をつなげるという点が、「初期」の作品には見られなかったものであり、この時期の違いを際立たせている。ファブリーニ夫人は『現在の創造』の副題の中の「諸個人の欲求」が、出版社の手を経て「集合的欲求」に書き換えられていたというエピソードを紹介している¹³⁾。この当時はミクロ-マクロをリンクさせるという発想自体が考え難かったことを示唆している。なおこの時期には国外との交流も盛んに行っている。とりわけ1985年からニューヨークのニュースクール大学に客員教授として招かれ、英語圏の研究者と交流を重ねる。そして「新しい社会運動」の理論的旗手として国際的に大きな反響を呼ぶことになる。『現在に生きる遊牧民—現代社会における社会運動と個人の欲求』を1989年に発表した。

さて、この「中期」に現代社会の認識を表す言葉としてメルッチが多く採用していたのが「複合社会」である。メルッチ自身はあまりはっきりと述べていないが、「中期」の作品には「複合あるいは複雑 (complex)」という形容詞が頻繁に出てきており、社会システム論からブリコラージュした影響をみることができる¹⁴⁾。『現在に生きる遊牧民』では、英語版編者が序文で現代社会を「複合的」と表現し、またメルッチ自身も本論第二部の題目を「複合社会と日常生活 (Complex Societies and Everyday Life)」としている¹⁵⁾。ここには「複合社会」というマクロな次元と「日常生活」というミクロな次元が1つの視野に収まっている。また、その2年後の1991年に発表された新版の『現在の創造』では副題を「複合社会における社会運動」としているように、マクロ-ミクロを媒介するものとして社会運動が位置づけられている。〈複合社会—社会運動—日常生活 (における個人の体験)〉という理論的枠組みがここで立てられていたことがみてとれる。

この「複合社会」が他の用語に替えられていく時期が出てくる。それをここでは「後期」そ

して「晩期」として捉えたい。代わる用語が「惑星社会 (planetary society)」に他ならない。「中期」後半の作品を注意深くみると、メルッチは「惑星」という形容詞を幾度も用いている¹⁶⁾。しかしながら「惑星社会」の要点となる現代社会における限界と可能性の緊張というテーマは、1991年の『自己の遊び——グローバル社会における自己の変化』で初めて中心的に論じられるようになる。1994年の『時代の移動／移動の時代——未来は今』では「惑星社会 (una società planetaria)」という表現が初めて登場する¹⁷⁾。そして冒頭で述べたように、『自己の遊び』の英語版として改訂した1996年の『プレイング・セルフ』において、「惑星社会」が何を意味するかが明確に定義されるに至った。同書の副題「惑星社会における人間と意味」でこの用語が登場していることから、メルッチの社会認識が「複合社会」から「惑星社会」へ移ったとみることができる。したがって「中期」とは質的に違う時期に入ったとみて、「後期」と捉えることができるだろう。

「惑星社会」は、彼の病が発症した1998年以降にも重要な位置を占める。2000年に発表された『人間になる——惑星社会におけるコンフリクトと新しい市民権』でもこの言葉が用いられている。2001年に急逝したメルッチに奉げられた追悼シンポジウムでもその講演集は『惑星社会におけるアイデンティティと運動』と命名された。ここからメルッチの社会認識は、「惑星社会」という言葉に託されたことがうかがえる。

さらに、メルッチは病を発症して以降、「惑星社会」のなかでも「内なる惑星」と表現した身体の問題や個々人の内面の変動に関するテーマへと分け入っていく。それを社会理論に練り上げようとしたのが、新原道信との協業による「聴くことの社会学」だった¹⁸⁾。またこの時期には「初期」「中期」にみられた一貫性と緻密さを備えた「理解可能な (intelligible)」叙述が徐々に少なくなり、段落の間や文章の合間に垣間見える「継ぎ目や裂け目」から「メルッチの思考そのものもつ『多重／多層／多面性 (multiplicity)』の表現そのもの」が頻繁に顔をのぞかせるようになる¹⁹⁾。晩年の詩作による表現にその結晶化をみることができる。

このような「内なる惑星」への関心や表現方法の変化から、病を負った1998年以降を「晩期」としておきたい。ただ「晩期」は「後期」と大きく断絶しているわけではなく、「惑星社会」をより身体や内面の動きから発展させようとしていたことから、マクロな社会認識という点では連続している。

では「中期」と「後期」「晩期」への移行でマクロ—ミクロの捉え方はどう変わったか。新原道信は、A・メルッチの晩期の考察を踏まえながら、現代社会のプロセスの深化が「ミクロコスモスとマクロコスモスの混交・混成・重合」をつくりだしており、ここでは惑星社会と内なる惑星 (身体) が同じ現象の裏と表のような関係に「体化」していると述べる。そして個々人の身体の奥底で発せられる未発の社会運動の声を聴くことが、社会変動そのものにふれる突破口になると論じる²⁰⁾。ここでは「中期」の〈複合社会—社会運動—日常生活 (における個

人の体験〉という枠組みに重ねる形で、しかしズレを伴うかたちで、「後期」「晩期」の〈惑星社会—地域—身体〉が再定位されようとしている（なお「地域」を媒介項に入れるのは新原の解釈である）。

しかしながら「中期」で中心を占めた「複合社会」が「後期」でまったく用いられなくなったわけではない。1990年代の主要な著作にも、以前より少なくなったとはいえ「複合社会」は登場する。『ブレイン・セルフ』の索引をみれば、「複合社会」と近い意味の「複雑性／複合性」「複合システム」が「惑星化」よりも多く登場するほどである。それゆえメルッチは現代社会の特性の何を強調するかによって「複合社会」と「惑星社会」を使い分けていたに違いない。「複合社会」の概念に欠けていた何か重要な点が存在したからこそ、「惑星社会」という新しい概念を提示するに至ったと考えるのが自然だろう。

ここに「3.11以降」の社会の「断絶」だけでなく「連続」も明るみに出すヒントがあるのではないだろうか。「3.11以降の惑星社会の諸問題」は、複合社会の諸問題が惑星社会にも持ち越され、それが惑星社会で新たに生じる諸問題と積み重なり、多重化／多層化・多面化（multiplication）しているとみるのである。そのためには、複合社会がどのような諸問題をもたらすのか、それに応えを導き出す可能性はどこにあるのかをみていく必要がある。そこで本章では「複合社会」とはどのような社会認識なのかを検討していこう。

3. 複合社会——「中期」メルッチの現代社会認識

(1) 複合社会の両義性・多義性

前章では「中期」メルッチの社会認識が「複合社会」というキーワードで捉えられていることを確認した。では「複合社会」とはどのような社会の特質を説明するのか。本章ではこの点を「3.11以降の状況」に関連させながら検討したい。

メルッチの「中期」の代表作『現在に生きる遊牧民』からみてみよう。同書の「まえがき」にて、複合社会に関する一文をこう始めている。「複合社会では、社会的コードを構築しようとする組織の権力は圧倒的ではないにせよ、相当なものである」²¹⁾。ここからまず読み取れるのは、複合社会におけるコンフリクトの争点である。すぐ後に続く文章で、「自己定義と人間行為の生物学的・動機的構造」が権力の介入の標的になり、「意味生成」がシステムの規制と制御の対象になっていると説明が続く。ここには存在や行為に意味を与える文化的次元（コード）がコンフリクトの争点になっているという認識が読み取れる。こうした議論は、ハーバーマスの「生活世界の植民地化」やフーコーの「マイクロ権力」とほとんど同じように見える。しかしメルッチの独自性は、こうした社会的介入は「相当なものである（considerable）」のだが、「しかし圧倒的ではない（but not overwhelming）」とみる点にある。なぜか。社会が個人の奥深くに介入してくると同時に、「(潜在的には)個人が自らの行為の条件や方向性をコン

トロールする力を高める」からである²²⁾。これが第2に読み取れる点である。この論点は、社会的行為の重要性と自立性を強調したトゥレーヌの行為論が部分的に取り込まれている。「部分的に」というのは、この点に関してメルッチは留保を付けているからである。つまり括弧で「(潜在的には)」力を高めるといふ。ここで個人はこうした行為の自律的な力を必然的に高めるのではなく、あくまでもそうした潜在力を持っている、ということである。つまり個人は自らが社会的な行為者になってゆく「個人化のポテンシャル」²³⁾を持っている、ということである。しかし個人に「一定水準の自律性が要求される」と同時に、「より大きなシステム統合や管理の集中化への必要性」も高まっていく。こうした両義的なプロセスが存在しているため「複合システムは奥深い曖昧さ (a deep ambiguity) を特徴とする」²⁴⁾。これが第3に読み取れる点である。そしてこうした「奥深い曖昧さ (両義性, 多義性)」を目に見える形にするのが現代の社会運動の意義である。社会運動は「支配的なコードへのシンボリック挑戦」であり、それを通じて「匿名化され非人格的な権力の組織」が特定されるのである²⁵⁾。これが第4に読み取れる点である。

したがって、複合社会では「自分は何者か」「この行為にはどのような意味があるのか」という存在や行為の意味付けが権力の介入の標的になっていること、しかしそれと同時に個人が行為を自律的に方向付ける潜在力を高めていること、ゆえに社会の要請と個人の欲求がぶつかりあう領域では極めて両義的なプロセスが進行していること、そして深い両義性のなかに隠れた権力を特定し支配的なコードに挑戦するのが社会運動の意義であることが読み取れる。

では、複合社会において個々人の意味生成に介入する圧力が強まるなかで、どうしたら個人は行為の自律性を自らのものとすることができるのか、あるいは何がそれを困難にするのか。これに答えるには、複合社会の両義的なプロセスをより詳しくみていく必要がある。メルッチは「複合社会」を論じるなかで、しばしば「複雑性 (complexity)」という用語でこの社会のプロセスを描出している。それゆえにここではメルッチのいう「複雑性」を辿るなかで「複合社会」の特質を浮かび上がらせていく。

(2) 複雑性という3つのプロセス

ではメルッチは「複雑性」をどう捉えていたか。複雑性は複合社会のプロセスであると捉えている。このような把握は、「中期」の作品でも用いられているが、むしろ「後期」前半の作品のなかで明確な説明が出てくる²⁶⁾。そこでは3つのプロセスを指摘する。

第1に、高度な分化／差異化 (differentiation) というプロセスである。現代社会はほとんど際限なく細分化したいくつもの社会組織によって成り立っている。私たちの日常生活はこうした社会組織を頻繁に出入りすることで営まれている。この社会組織は、対面的な接触を中心に成立している現実の社会圏域でもあれば、メディアやイメージを解した想像上のものであ

る。こうしたいくつもの現実および想像の社会組織によって成り立つ現代社会は、伝統的社会と比べると著しい違いがある²⁷⁾。伝統的社会の小さな村落共同体では、自己充足的なかたちで生活圏が統合されていた。そのなかで家族は子供の育成と生産活動の拠点となっていた。近代化のなかで教育は学校へ、生産活動は企業へというように異なった機能へと分化していった。こうした高度な分化のプロセスが社会全体を覆うようになった今日では、家庭、職場、余暇、独りである時間といった別の生活圏への移動をし続ける。互いに差異化された生活圏では、そこでしか通用しない言葉づかいとふるまいの規則に従うことが要求される。

第2に、たえまなく加速したたびたび発生する変化 (variability) というプロセスである。前者の分化／差異化が空間的な次元に関する複雑性のプロセスだとすれば、変化の高速度と頻発性はその時間的な次元に関連するプロセスである。変化の速度と頻度がかつてないほどの度合いで起こることにより、私たちが生まれ育ったときに身に付けた習慣、習得した知識、使用していた日用品はすぐに使い物にならなくなる。昨日までは重要で意味をなしていたものが今日には役に立たなくなるという体験が日常的なものとなる。

最後に、行為する機会の可能性が超過する (excess of possibility) プロセスである。現代社会では人間が対処可能で有効活用できる範囲を遥かに越えるほどの可能性が常に提供される。日常生活はこうした可能性であふれかえている。インターネットから毎日発信される膨大な情報をすべてチェックすることはできないし、携帯電子端末に付いている様々な機能をすべて使いこなすこともできない。可能性という食べ放題のテーブルの前に毎日座り、食べ切れないという不全感を思い知らされ続ける。

こうした複雑性のプロセスによって、日常生活は常に不確実性をはらむことになる。というのも、本来ならばその大部分が慣れ親しんだ行為の繰り返しによって成り立っていた日常生活のなかに絶えず未知との遭遇が待ち受けていることになるからである。つい先ほどいたのとは異なるこの場所ではどうしたらよいのか。昨日までとは全く違ってしまった新しい状況にどう取り組んだらよいのか。溢れかえる可能性のなかから何を選べばよいのか。私たちは日常生活を送るために選択をしなければならぬ状況に直面し続ける。これがメルッチのいう「選択のパラドクス (paradox of choice)」を引き起こしている。

(3) 選択のパラドクス²⁸⁾と意思決定

「選択のパラドクス」とは何か。近代社会のなかで選択は個人の意志と自由からもたらされるものと考えられていた。しかし複雑性のプロセスが進化し、不確実性が常態化した現代社会において、選択はもはや自由ではなく義務である。「3.11以降の状況」では、食事をとるといふ日常生活の慣習行動までもが生命の維持／破壊に直結するような選択になっていたことに気付かされる。この野菜にはどれほどの放射性物質が含まれているのか、公表されている数値は

人体に安全なのか、その情報はどれほど信頼できるものか。生活を送るためには食べていかなければならない。しかし食べるという選択をすれば放射性物質を体内に摂取し生命を危険にさらすかもしれない。食べないということすら1つの選択である。食べないという選択も食べるという選択を延期したことにすぎない。もはや選択するということから逃れることはできない。いずれの選択も生命に危険を及ぼす不確実性を受け入れざるを得ない。こうして来る日も来る日も「答えなき問い (questions without answers)」に直面することになる。

しかし、である。たしかに現代社会の日常生活には不確実性が常態化し、選択のパラドクスに直面していることは事実だとしても、私たちの多くが「答えなき問い」を真剣に考えて選択をしているかといえばそうでもない。「3.11」から3年が経とうとするなかで、東日本大震災の「忘却」「風化」が進んでいるといわれる。「底知れぬ喪失」を体験した人々を除く圧倒的多数は、選択に忙しい日常生活を送るなかで、「3.11」が何だったかを部分的にもしくは大部分を忘却していく。

ここに複合社会の巧妙な仕組みがある。複雑性が深まる社会は、高度に分化した社会組織のなかに不確実性を縮減するメカニズムを備えている。それが顔の見えにくい中立的な装いを持った権力の意思決定プロセスである。この意思決定プロセスのなかで、多様な選択肢のなかから「選抜 (selection)」が行われていく。そしてメルツチによればここが「最も不透明な部分」である。この領域には、「権力の諸関係と意思決定に伴う不可避のジレンマとリスクの両方が潜んで」いるのだが、諸々の政治的単位と大規模な法人組織といった「複合システムの政治的統治体 ([t]he government bodies of complex systems)」は、意思決定を入念に準備し、創り出し、遂行することで「選抜」を実現していく。この意思決定プロセスには権力が集中し、そこは常に「秘密主義 (secrecy) と説明責任の欠如 (unaccountability)」が存在する²⁹⁾。

「3.11 以降の状況」で顕在化したのは、いかにエネルギー選択をめぐる巧みな「選抜」がなされ、その意思決定プロセスを「秘密主義と説明責任の欠如」によって匿名化され非人格的な権力の組織が入念に遂行してきたかということである。例えば、私たちが毎月支払う電気料金は原価に利潤を上乗せした額で決められ (総括原価方式)、その2%弱が明細書に未記名の内税 (電源開発促進税) として徴収されていた。その一部が過疎地域に集中する原発立地自治体へ「迷惑料」として交付される (電源三法交付金)。原発立地から政策決定に至るまでは「原子カムラ」という閉鎖的コミュニティ内部の談合によって決定される。原発立地地域は地域間格差を背景とした非対称な関係で「原子カムラ」と結び付けられる。原発「安全神話」は広告キャンペーンによって社会に刷り込まれる (「PA 戦略」)。「万が一」事故が発生し、その賠償が保険限度額を超える場合、国会の議決により政府が援助 (原子力損害賠償法)、つまり国民負担が現実となる。除染した土壌、高レベル放射性廃棄物の処分をめぐる難題は未解決のままである。

ここで改めて問いを発さざるを得ない。選択の主体は誰なのか。その基準は何か。それは正しいのか。その正しさは何によって保証されるのか。そもそも選択の義務を作り出すに至った条件とは何だったのか。メルッチが「選択のパラドクス」を強調するのは、複合社会の仕組みが、複雑性の増大する分だけ成長する不確実性を首尾よく縮減していくなかで、再びこうした問いを自覚するよう促すからだと思われる。こうして日々の選択のなかにある「答えなき問い」に再び直面することになる。

(4) 複雑性のもたらす不可視のジレンマ³⁰⁾

「選択のパラドクス」がパラドクスだと意識化したときに初めて、「答えなき問い」に複雑性のもたらすジレンマが横たわっていたことに気付く。このジレンマのなかで個人の欲求と複合社会の要請が折衝する。メルッチは4つのジレンマを析出してみせる。それによって何に注意の焦点を絞ればよいかの道筋を与えようとする。

第1に、自律と管理・制御 (autonomy and control) との間のジレンマである。自律は「選択」本来の意味、すなわち個人の意志と自由と能力を活かしたいという欲求に依る。しかし複合社会はそれに介入する。管理・制御は、個人の欲求ではなく複合社会の要請に沿った行動を個人自らが選択するように操作する傾向をいう。この管理・制御は、情報の操作とその情報を解釈するための文化コードにまで及ぶ。

複合社会の主要な資源が情報であり、コンフリクトの争点が文化コードにあるとメルッチがいうのはこのジレンマと関連してくる。「3.11以降」、大気中にどれほどの放射性物質が飛散しているか、放射性物質の汚染水がどれほど海に流出しているのか、摂取する食物にはどれほどの放射性物質が含まれているのかといった情報なくしては、「普通の」日常生活を送ることすらままならなくなった。「ベクレル」「シーベルト」といった専門用語が日常語となり、無色無臭の放射性物質はもはやガイガーカウンターが計測するデータでしか把握することはできない。この情報を把握しなければ意思決定できない。「3.11」直後に福島第一原発事故からの放射性物質の拡散経路の情報が、被災地の住民や大部分の日本国民に知らされなかったのは、死活の情報が社会の混乱を避けるという社会の要請のもとに管理・制御されていた事実を示している。さらに、こうした情報が意味あるものになるためには、それを解読する文化コードが必要である。「100シーベルト以下は国が定める安全基準で人体に影響はない」「汚染水による海への影響はない」といった国家が定める基準値や国から委任を受けた専門家集団が提示する支配的な文化コード（「安全神話」）が正しさの基準とされれば、たとえ「100ミリシーベルトであっても、遺伝子の突然変異などによりがん発症の可能性は否定できない」といった見解はないがしろにされてしまう。

こうした第1のジレンマと関連するのが、第2の責任／応答力と全能 (responsibility and

omnipotence) のジレンマである。ここには人類を含めた生きとし生けるものが今後も生き延びていくために決して冒してはならない自然の制約に責任を持ちそれを維持していこうという欲求と、複合社会が自己介入の力をあくまで拡大していこうとする欲望との間のジレンマである。核エネルギーが象徴しているように、複合社会はすべての生物の生存の条件を完全に制御する地点まで達し、自らの意志で自らの存続を断ち切るまでに至った。生物と生態系の再生産メカニズムに介入するまでの力にどう責任／応答力を発揮するのか否かという難題に直面する。

このジレンマから第3に、知識の不可逆性と選択の可逆性 (irreversibility of knowledge and reversibility of choices) のジレンマが生じる。知識の不可逆性は、複合社会がもはや取り消すことのできない科学的知識によって規定されていることを示している。1938年に核分裂現象が発見されて以来、もはやこうした科学的知識をなかったことにはできない。その意味で科学的知識はいったん発見されてしまえばもはや不可逆的なものになる。しかしながら、それをどのように使うかは選択次第である。エネルギー政策をめぐる決定はたとえ社会的に大きな慣性の力が働いているとしても不可逆的なものではない。「3.11」後にドイツが2020年までに原発を全廃するという決定を行ったように、選択は可逆的である。あるいは、日本では民主党政権の脱原発の方針から自民党政権による原発推進への回帰にみられるように、ここでも選択は可逆的である。科学的知識の不可逆性は、「エネルギー政策や科学政策、軍事政策に関する、可逆性をもった選択と、選択を決定づける行動様式に」左右されるのである³¹⁾。

最後に、包摂と排除 (inclusion and exclusion) のジレンマである。複雑性のプロセスが全域に拡張した複合社会はもはや「外部」を持たない。それゆえあらゆるものが複合社会に内部化されることになる。ここでは包摂は、「グローバル・スタンダード」「公式見解」「正論」といった支配的な文化コードを適用して、「諸々の差異を平板化し、諸々の周縁的文化を、少数の中心から見て、さして重要でなく風変わりな珍奇さをもった付属物へと変形させる」。この均一化、標準化に抵抗することは「ほぼ不可避的に排除を免れ」ない³²⁾。

メルッチが繰り返し述べるように、私たちはこうしたジレンマを普段意識することはほとんどない。なぜなら顔の見えにくい中立的な装いを持った権力の意思決定プロセスがこれらを隠しているからである。ではこれらのジレンマに光をあてるには何が必要か。ここでメルッチは、自由の再定義の必要性を説く。それが『現在に生きる遊牧民』本論最終章の最終節の「自由は変わりつつある (Transforming freedom)」である。

(5) 変わりつつある自由³³⁾

近代社会の当初、自由をめぐる運動は経済的権利と市民権の要求に結び付いていた。こうした自由の意味は未だ重要なものとして残っているが、複合社会では新しい意味が生じている。

それゆえ自由は完全に「変わった」わけでもまったく「変わっていない」のでもなく、「変わりつつある (transforming)」のである。

メルッチは3つの論点を析出している。第1に、「欲求からの自由 (freedom from needs)」は「欲求への自由 (freedom to needs)」に変わりつつある。生命維持に直結する第一次欲求がかなりの程度満たされるようになった現代社会において、欠乏からの自由以上に、どの欲求を選ぶかという自由が重要性を増してくる。何を健康とするか、幸せとは何か、快樂とは何か、正常とは何かをどう定義するかという文化的次元が重要になる。ここに支配的な文化コードによる社会的介入のベクトルを反転させて、個人の自律性を高める資源とする自由の意味が出てくる。

第2に、「持つことの自由 (freedom to have)」は「であることの自由 (freedom to be)」に変わりつつある。所有の権利は近代社会の2つのパラダイムのなかで現在もなお基本となっている。しかし意味ある存在でありたいという自由がもうひとつの権利の型として生まれつつある。ここで、自分が何者であるかを自らに由って決めたいという個々人の存在の欲求と、正常や健康とは何かといった存在の条件に介入する社会の要請とが衝突する。

第3に、「平等への権利 (right to equality)」は「差異への権利 (right to difference)」に変わりつつある。メルッチによれば、平等権は事実上未だ近代社会の宿題として残っているが、それが今日の多様性の承認と個人的差異の尊重の基盤となっている。ではこの「差異への権利」を新たに支える共通の基盤は何になるのか。メルッチは「種としての人類全体が生態系の未来、そしておそらくは宇宙にさえつながっている」という自覚のなかを求めるのである。

「中期」メルッチの主要作である英書『現在に生きる遊牧民』の本論は、ここで終わっている。複雑性のもたらすジレンマのなかで複合社会における自由は変わりつつあること、「この惑星の生 (life on this planet) の存続と破壊は私たちの日常生活の選択と直結している」という主張で本論は閉じられる³⁴⁾。ここでは、社会的行為の可能性の拡大が人類という種と生態系の限界にまで達したという社会認識が、強い危機感とともに表現されている。

(6) 惑星社会へのエラボレーション

「中期」から「後期」にかけての1990年代の作品では、日常生活の選択がこの惑星の生の行方に直結しているという認識が前面に出てくる。そして『移動の時代／時代の移動』の導入部で初めて「惑星社会」という用語が登場する。「19世紀の文化から私たちが受け継ぎ、今なお私たちの辞書を満たしている数々の言葉は、惑星社会の挑戦とジレンマに正面から向かい合おうするとき、手から砂がこぼれ落ちるように私たちから逃げていってしまう³⁵⁾」。そして直後に以下の文章が続く。

核の力の出現は、人類史上初めて、不可逆的なかたちで、自己破壊の可能性を招いた。これより以後、種の存続は私たちの選択にかかっている。

遺伝子コードへの介入は、私たち自身の生物学的特性を予測できない決定にゆだねた。この予測できない決定とは、私たちが自らの行為にたいして限界を設けられる場合のみ、本来の限界となるようなものである。これらの出来事は種の進化のなかに質的な断絶をもたらす。この非連続性こそ、過去のあらゆる歴史をみても、決して見過ごすことのできないものであり、意識と行為の跳躍を要請するものである³⁶⁾。

ここに現代社会が過去のものと同断絶するような不可逆的な変化が起きたという認識がはっきり表れている。その典型例として原子力エネルギーと遺伝子操作を挙げる。まさに「3.11以前」にも「客観的現実のなかにすでにとっくに存在」し、「3.11以降の状況」でそのように認識せざるを得なくなった「劇的な収支決算」の要点がすでに述べられている。

こうして「後期」メルッチの前半期の主要作『自己の遊び』や『移動の時代／時代の移動』では、可能性だけでなく、それと限界との緊張関係という論点が前景に出てくる。それらが相互に折衝し浸潤する「境界領域 (frontier territories)」に身を置いた現代社会認識の展開がはっきりとみられるようになる。複合社会における可能性の拡大とそれがもたらすジレンマを解明するだけでなく、限界と可能性の折衝と浸透の中に含まれている潜在力をも明らみに出そうとする。こうした探求のなかで「惑星社会」へのエラボレーションが行われるのである。

それゆえ「複合社会」の概念に欠けていた「何か」とは、一言でいえば「限界」という論点ではないだろうか。社会システム論からプリコラージュした「複合社会」は、際限なく増大していく複雑性をどう制御しシステム統合を達成していくかに焦点が当てられる。ここから「限界」の論点が出てこない。メルッチは社会と人間が本来有する「限界」への理解を深めない限り、複合社会の難局を乗り越えることは望めないと考えたからではないだろうか。自らを破壊する力を持つまでに発展した社会において、それにブレーキをかけるのは私たちの選択しかない。もし「限界」を社会認識に含めないで社会理論を組み立て、「複合システムの政治的統治体」が準備する意思決定プロセスに選択を委ねても、当面の複雑性が縮減されるだけで、問題を先送りしたにすぎない。「カタストロフなのか、生き延びるのか、自らの限界性を受け容れようとするのか、拒否しようとするのか、あるいは乗り越えようとするのか、という決断³⁷⁾」を手中にしていることがリアルな現実となった「3.11以降の状況」において、「この惑星の生の存続と破壊は私たちの日常生活の選択と直結している」ことをどう社会理論のなかに組み込むか。「惑星社会」は、「複合社会」の理論的射程が届いていなかった社会と人間の「限界性」——惑星としての地球と「内なる惑星」としての身体——を組み込んで練り上げられていくことになる。

4. 結びにかえて

最後にまとめを行い、今後の方向性と課題を示して結びにかえたい。本稿では、メルッチの惑星社会への社会認識の道行きを辿りながら、「3.11 以降」の現代社会理論を練り上げていくための予備的考察を行った。まず社会認識の変化をメルッチの著作のなかに位置付け、「中期」の作品では「複合社会」が彼の社会認識のキーワードとして用いられ、それが理論的な断絶と連続を持ちながら「後期」の作品で惑星社会へと移っていくことを概観した。そして「複合社会」について、複雑性、選択のパラドクス、複雑性のもたらす不可視のジレンマ、変わりつつある自由という論点を「3.11」以降の個別具体的な状況と関連させながら検討した。それにより「複合社会」の焦点は、社会的行為の可能性の拡大とそれがもたらすジレンマの解明に置かれていることがわかった。社会の存続そのものを成り立たせる限界にまで可能性の拡大は到達しているという社会認識が、強い危機感とともに表現されて「中期」の作品は閉じられていた。まさに「限界」の論点を含めた社会認識が「後期」以降の「惑星社会」につながっていくことを指摘した。

今後の方向性について、「惑星社会」の検討が必要である。この社会認識の中心テーマが〈限界と可能性の緊張〉に置かれる。それゆえ「後期」の作品に基づきながら、限界と可能性がせめぎあう地点からどのような新たな知見が析出でき、それが「3.11 以降の状況」の社会理論の構築につながるのかを検討するのが今後の課題である。

注

- 1) A. Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society* (New York: Cambridge University Press, 1996) = 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社、2008年、3ページ。
 - 2) 「中期」メルッチの日本における研究系譜は主に2つある。第1に、ハーバーマスからメルッチへという系譜で、構造論・システム論・批判理論とそれらの乗り越えを企図してメルッチを位置付けた研究である。山之内靖「システム社会の現代的位相(上・下)」『思想』804(1991年)、4-35ページおよび804(6)(1991年)、99-129ページ。佐藤慶幸「生活世界と社会運動—ハーバーマスからメルッチへ」『社会科学討究』40(3)(1995年)、279-308ページ。
- 第2に、トゥレーヌからメルッチへという系譜で、社会運動の行為論的アプローチの批判的継承と「新しい社会運動」の議論のなかにメルッチを位置付けた研究である。矢澤修次郎「新しい社会運動」古城利明・矢澤修次郎編『現代社会論〔新版〕』有斐閣、1993年、207-230ページ。矢澤修次郎「総論 社会運動研究の現状と課題」矢澤修次郎編『講座社会学15 社会運動』東京大学出版会、2003a年、1-26ページ。矢澤修次郎「社会運動と社会学」矢澤修次郎編、前掲書、2003b年、57-102ページ。伊藤るり「〈新しい社会運動〉論の諸相と運動の現在」『岩波講座 社会科学の方法』岩波書店第8巻、1993年、121-157ページ。長谷川啓介「声とまなざし・再考」庄司興吉編『世界社会と社会理論—総体性と個性の媒介』粹出版社、1999年、206-227ページ。長谷川啓介「社会運動概念の再構築—アルベルト・メルッチのパラダイム革新作業」『年報社会学論集』関東社会学会

- 第13号(2000年), 61-72 ページ. 長谷川啓介「情報時代の社会運動研究の新しい課題—カステル理論とメルッチ理論の相補性について」新原道信他編『地球情報社会と社会運動』ハーベスト社, 2006年, 308-323 ページ. 曾良中清司「社会運動論の回顧と展望」曾良中清司ほか編著『社会運動という公共空間』成文堂, 2004年, 特に250-252 ページ. 川北稔「社会運動と集会的アイデンティティー—動員過程におけるアイデンティティの諸相」曾良中清司ほか編著, 前掲書, 53-82 ページ.
- 3) 「後期・晩期の作品 (later works)」から, メルッチの「聴くこと社会学」と「未発の社会運動」を継承する試みは, 新原道信「聴くこと社会学のために—二〇〇〇年五月の“賭け (progetto)”の後に」『地域社会学学会年報』第13号(2001年), 15-19 ページ. 新原道信「自らを見直す市民の運動」矢澤修次郎編, 前掲書, 2003年, 139-156 ページ. 新原道信「生という不治の病を生きるひと・聴くこと社会学・未発の社会運動—A. メルッチの未発の社会理論」東北社会学研究会『社会学研究』76号(2004年), 99-133 ページ. 新原道信「いくつものもうひとつの地域社会へ」新原道信・広田康生編著『地域社会学講座2 グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会』東信堂, 2006年, 227-246 ページ. 新原道信『境界領域への旅—岬からの社会学的探求』大月書店, 2007年. 新原道信「『グローバリゼーション/ポスト・モダン』と『プレイング・セルフ』を読む—A. メルッチが遺したものを再考するために」『中央大学文学部紀要』223号(2008a年), 139-158 ページ. 新原道信「訳者あとがき—『瓦礫』から“流動する根”」A. メルッチ, 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳, 前掲書, 2008b年, 241-249 ページ. 新原道信「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由をめぐる—古城利明とA. メルッチの問題提起に即して」『法学新報』115(9/10)(2009年), 697-722 ページ. 新原道信「A. メルッチの“境界領域の社会学”—2000年5月日本での講演と2008年10月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学20号(2010年), 51-76 ページ. 新原道信「A. メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ—『フィールドワーク/デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学21号(2011年), 27-65 ページ. 新原道信「“惑星社会の諸問題”に回答するための“探究/探求型社会調査”—『3.11 以降』の持続可能な社会の構築に向けて」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学23号(2013年), 47-75 ページ. 新原道信「3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求(1)—A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学24号(2014a年), 43-67 ページ. 新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク』中央大学出版部, 2014b年. M. Niihara, “Homines patientes e sociologia dell’ascolto”, L. Leonini ed., *Identità e movimenti sociali in una società planetaria: In ricordo di Alberto Melucci* (Milano: Guerini, 2003, pp. 195-206). M. Niihara, “Il corpo silenzioso: Vedere il mondo dall’interiorità del corpo”, *ibid.*, pp. 207-219. イタリアでは, A. Leonini, ed., *ibid.*, G. Chiaretti & M. Ghisleni, ed., *Sociologia di Confine: Saggi intorno all’opera di Alberto Melucci* (Milano-Udine: Mimesis Edizioni, 2010).
- 4) メルッチ追悼シンポジウムでなされた議論について, 日本から参加した新原道信は全体的に2つのトーンに割れたと記録している. その1つは「晩年のメルッチが, 個々人の内面の問題に関心が集中し, 社会紛争にとり組まなくなった」という批判であり, これに対してもう一方は「臨床の社会学は社会紛争の意味を明らかにすると同義であり, 個々人の行為のつらなりのなかに社会紛争を見出すのが, 今日社会学者の役割だ. 新しい社会運動の誕生を, “痛む”という行為の産出としてみるべきだ」という立場である. そして「このシンポジウムでの議論からみてとれるのは, マクロで可視的な社会変動への着目と, ミクロで微視的な問題への着目との分裂」であると述べる(新原道信, 前掲書, 2006年, 230 ページ). この「分裂」は, 後述する「中期」と「後期」「晩期」の捉え方の違いに関連しているように見える.
- 5) 山下裕介・吉野英岐「特集『東日本大震災・福島第一原発事故を読み解く』によせて」『社会学評

- 論』日本社会学会, 64 (3), 330-341 ページ.
- 6) 新原道信, 前掲書, 2014a 年, 44 ページ.
 - 7) A. Melucci, *Libertà che Cambia: una Ecologia del Quotidiano* (Milano: Edizioni Unicopli, 1987), p. 11. Alberto Melucci, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society* (Hutchinson Radius, 1989), p. 13 = 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店, 1997 年, xxxv ページ.
 - 8) A. メルッチ, 同書, xxxiv-xxxv ページ.
 - 9) 同書, vii ページ.
 - 10) 同書, 同ページ.
 - 11) メルッチの全文献リストは以下を参照. A. Leonini, (a cura di) *Identità e movimenti sociali in una società planetaria* (Milano: Edizioni Angelo Guerini, 2003), pp. 13-31.
 - 12) A. メルッチ, 前掲書, 2008 年, vi ページ.
 - 13) 同書, v ページ.
 - 14) 山之内靖, 前掲書, 1991 年.
 - 15) 日本での研究もメルッチの現代社会の認識を「複合社会」とみることはおおむね一致している. 例えば, 山之内靖, 前掲書, 1991 年, 11 ページ. 伊藤るり, 前掲書, 1993 年, 139-141 ページ. 佐藤慶幸, 前掲書, 1995 年, 297-300 ページ.
 - 16) 例えば, A. メルッチ, 前掲書, 1997 年, 242 ページ.
 - 17) A. Melucci, *Passaggio d'epoca: il futuro è adesso* (Milano: Feltrinelli, 1994), p. 12.
 - 18) A. Melucci, "Sociology of Listening, Listening of Sociology", 新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域—自己決定・共同, その主体』地域社会学会年報 13, 2001 年, 1-14 ページ.
 - 19) 新原道信, 前掲書, 2008 年, 242-243 ページ.
 - 20) 新原道信, 前掲書, 2006 年, 231-233 ページ.
 - 21) A. Melucci, op. cit., 1989, p. 11. A. メルッチ, 前掲書, 1997 年, xxxii ページ.
 - 22) Ibid., p. 12. 同書, 同ページ.
 - 23) Ibid., p. 48. 同書, 47-48 ページ.
 - 24) A. Melucci, op. cit., 1989, p. 12. A. メルッチ, 前掲書, 1997 年, xxxii ページ.
 - 25) Ibid. 同書, 同ページ.
 - 26) A. Melucci, op. cit., 1994, p. 51, p. 103. メルッチ, 前掲書, 2008 年, 62 ページ.
 - 27) A. Melucci, op. cit., 1994, pp. 102-105.
 - 28) A. メルッチ, 前掲書, 2008 年, 62-64 ページ.
 - 29) A. Melucci, op. cit., 1989, pp. 174-175. メルッチ, 前掲書, 1997 年, 226 ページ.
 - 30) Ibid., pp. 174-177. 同書, 226-230 ページ.
 - 31) Ibid., p. 176. 同書, 229 ページ.
 - 32) Ibid., pp. 176-177. 同書, 229-230 ページ.
 - 33) Ibid., pp. 177-179. 同書, 230-233 ページ.
 - 34) A. メルッチ, 前掲書, 1997 年, 233 ページ.
 - 35) A. Melucci, op. cit., p. 12.
 - 36) Ibid.
 - 37) A. メルッチ, 前掲書, 1996 = 2008 年, 34 ページ.